

Oracle Solaris Studio 12.3 リリース ノート

2011年12月

- 2 ページの「システム要件」
- 3 ページの「ディスクスペースの要件」
- 4 ページの「Solaris オペレーティングシステムのパッチ」
- 4 ページの「インストールについて」
- 7 ページの「サードパーティーソフトウェアの情報」
- 8 ページの「Usage Data to Oracle」
- 8 ページの「今回のリリースで削除された機能」
- 9 ページの「今後のリリースで削除される機能」
- 9 ページの「ドキュメントについて」
- 10 ページの「国際化および日本語化に関する情報および既知の問題」

システム要件

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアは、SPARC ベースまたは x86 ベースプラットフォームの Solaris 10 オペレーティングシステムまたは Oracle Solaris 11 オペレーティングシステム、または Linux オペレーティングシステムにインストールできます。システム要件は次のとおりです。

表1 システム要件

	SPARC ベースシステムの Solaris OS	x86 ベースシステムの Solaris OS	Linux OS	デスクトップシステム OS
オペレーティングシステム	Solaris 10 10/08 および後続の Solaris 10 アップデート Solaris 11 および後続の Solaris 11 アップデート	Solaris 10 10/08 および後続の Solaris 10 アップデート Solaris 11 および後続の Solaris 11 アップデート	Oracle Linux 5 および 6 Red Hat Enterprise Linux 5 および 6	Microsoft Windows XP Professional SP3、Microsoft Windows Vista SP1、Microsoft Windows 7 Professional、Ubuntu 9.10 またはそのあとの Ubuntu アップデート、Macintosh OS X 10.5 またはそのあとの Macintosh OS X アップデート (デスクトップディストリビューションのインストールのみ)
CPU	SPARC システム SPARC64 プラットフォームシステム	x86 64 ビットのプラットフォームシステム	x86 64 ビットのプラットフォームシステム	x86 64 ビットのプラットフォームシステム
メモリー	推奨: 3G バイト 最小: 1.5G バイト (IDE で大規模プロジェクトを処理する場合は、より多く必要になる可能性がある)	推奨: 3G バイト 最小: 1.5G バイト (IDE で大規模プロジェクトを処理する場合は、より多く必要になる可能性がある)	推奨: 3G バイト 最小: 1.5G バイト (IDE で大規模プロジェクトを処理する場合は、より多く必要になる可能性がある)	推奨: 3G バイト 最小: 1.5G バイト
インストーラに必要な一時ディスク容量	2G バイト	2G バイト	1.5G バイト	N/A
インストールされた製品で必要になるディスク容量	1.76G バイト	1.52G バイト	1.43G バイト	365K バイト
スワップ領域	推奨: 2G - 4G バイト 最小: 1G バイト	推奨: 2G - 4G バイト 最小: 1G バイト	推奨: 2G - 4G バイト 最小: 1G バイト	N/A

表1 システム要件 (続き)

	SPARC ベースシステムの Solaris OS	x86 ベースシステムの Solaris OS	Linux OS	デスクトップシステム OS
オペレーティングシステム の構成	Solaris 10 OS の場合: 全体 Solaris ソフト ウェアグループと OEM サポート、全体 Solaris ソフトウェア グループ、または開 発者 Solaris ソフト ウェアグループ。オ ペレーティングシ ステム構成を確認す るには、インストール したパッケージを確 認する必要があります。 それぞれの構成 に固有のパッケージ がインストールされ ます。詳細 は、Solaris OS のイン ストールマニュアル を参照してくださ い。	Solaris 10 OS の場合: 全体 Solaris ソフト ウェアグループと OEM サポート、全体 Solaris ソフトウェア グループ、または開 発者 Solaris ソフト ウェアグループ。オ ペレーティングシ ステム構成を確認す るには、インストール したパッケージを確 認する必要があります。 それぞれの構成 に固有のパッケージ がインストールされ ます。詳細 は、Solaris OS のイン ストールマニュアル を参照してくださ い。	Linux OS の場合: glibc.i686、 glibc-devel、およ びglibc-devel.i686 を含む Development/Libraries Package Group。	N/A

IDE、dbxtool、DLight、コードアナライザ、およびパフォーマンスアナライザを実行するには、Java SE Development Kit (JDK) 6 Update 24 以降が必要となります。これらのツールを使用する予定で、かつ必要な JDK が手元にない場合には、<http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads/index.html> から JDK をダウンロードできます。

スワップ領域を確認または追加するには、『Oracle Solaris Studio 12.3 インストールガイド』の付録 B 「スワップ領域の追加」の手順を参照してください

ディスクスペースの要件

インストールする Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのサイズを次の表に示します。

表2 Oracle Solaris Studio 12.3 のインストールされるコンポーネントの大きなディスク容量要件

インストールするコンポーネン ト	SPARC ベースプラットフォーム の Solaris OS	x86 ベースプラットフォームの Solaris OS	Linux OS
すべてのコンポーネント	1.76G バイト	1.52G バイト	1.43G バイト
C および C++ コンパイ ラ、およびサポートファイ ル	337.6M バイト	338M バイト	187.68M バイト
IDE、dbx デバッガ、およ びサポートファイル	284.34M バイト	257M バイト	286.7M バイト
Performance Library、Fortran コンパイ ラ、およびサポートファイ ル	580M バイト	421.67M バイト	433.4M バイト

Solaris オペレーティングシステムのパッチ

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアでは、Solaris 10 用のオペレーティングシステムパッチが提供されています。今回のリリースに含まれるコンパイラおよびツールを正しく動作させるには、これらのパッチが必要です。この Oracle Solaris Studio 12.3 リリースには、次の必要な Solaris OS パッチが含まれています。これらのパッチをインストールするには、パッケージインストーラをダウンロードする際に含まれる `install_patches.sh` ユーティリティを使用します。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solarisstudio/documentation/index.html> にある『Oracle Solaris Studio 12.3 インストールガイド』を参照してください

表 3 必要な Solaris 10 OS パッチ

パッチ	SPARC ベースシステムのパッチ番号	x86 ベースシステムのパッチ番号
SUNWlibC	119963-24	119964-24
libmstk	120753-10	120754-10
アセンブラ	118683-07	119961-10
リンカー (Solaris 10 8/11 のみ)	147436-01	147437-01

インストールについて

この節では、Oracle Solaris Studio 12.3 のこのリリースのインストールに関する既知の問題について説明します。

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストール

Solaris 10 OS または RPM を使用する Linux OS を実行しているシステムに Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをインストールするには、Oracle Solaris Studio 12.3 パッケージインストーラを使用します。パッケージインストーラのユーザーは、ソフトウェアのインストール先となるシステム上で root 特権を持っている必要があります。グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) インストーラと非 GUI インストーラのどちらの場合も、インストールディレクトリとインストールするソフトウェアコンポーネントを選択できます。実行時ライブラリのみをインストールするには、GUI インストーラ、非 GUI インストーラのいずれかを `--libraries-only` オプション付きで起動します。

デスクトップシステムにインストール可能な、IDE (およびコードアナライザをインストールする場合はコードアナライザ) のディストリビューションを含む ZIP ファイルを生成するように、GUI インストーラ、非 GUI インストーラのいずれかに要求できます。

Solaris 10 または Linux システム上でパッケージインストーラを使用するための完全な手順については、『Oracle Solaris Studio 12.3 インストールガイド』を参照してください

root 権限がないシステム、または RPM を使用していない Linux OS を実行しているシステムにソフトウェアをインストールする場合は、tar ファイルを使用できます。

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのアンインストール

パッケージインストーラで行なった Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストールをアンインストールする場合は、ソフトウェアの手動アンインストールを試みるのではなく、提供されたアンインストールを使用します。アンインストールの使用方法については、『Oracle Solaris Studio 12.3 インストールガイド』の第 3 章で説明されています。アンインストールの使用時に問題が発生し、アンインストールを使ってソフトウェアを正常にアンインストールできない場合に手動でアンインストールを行うための安全な手順については、インストールガイドの第 4 章で説明されています。

Oracle Solaris Studio のパッケージがおそらく正しくインストールされており、インストールディレクトリ内にアンインストールが存在していても、`/root/.nbi` が破壊されているためにアン

インストーラが失敗する場合があります。この場合に、Oracle Solaris Studio のパッケージとインストールディレクトリをアンインストーラに強制的に削除させるには、アンインストーラの起動時に `--force-uninstall` を指定します。詳細は、インストールガイドの第 4 章を参照してください。

インストールディレクトリ

Oracle Solaris Studio 12.3 パッケージインストーラによってインストールされるソフトウェアは、次の場所に配置されます。

Oracle Solaris Studio 12.3	<code>[/alternate_root]/installation_directory/solarisstudio12.3</code>
NetBeans 7.0.1 IDE および NetBeans C/C++ Plugin 7.0.1	<code>[/alternate_root]/installation_directory/lib/netbeans-7.0.1</code>

Solaris プラットフォームの場合、デフォルトのインストールディレクトリは `/opt` になります。Linux プラットフォームの場合、デフォルトのインストールディレクトリは `/opt/oracle` になります。

代替ルートディレクトリを指定した場合、実際のインストールディレクトリへのフルパスは、代替ルートディレクトリのパスのあとにインストールディレクトリのパスを連結して作成されます。

例:

- Solaris システムで、代替ルートパス `/export/home/OSS12.3` を指定し、デフォルトのインストールディレクトリパス `/opt` はオーバーライドしません。有効なインストールディレクトリパスは次のようになります。
`/export/home/OSS12.3/opt`
- Solaris システムで、インストールディレクトリ `/opt/myoss12.3/` を指定し、代替ルートディレクトリは指定しません。このインストールでは次のディレクトリが作成されます。
`/opt/myoss12.3/solarisstudio12.3`
- Linux システムで、インストールディレクトリを指定せず (デフォルトの `/opt/oracle` のまま)、代替ルートディレクトリも指定しません。このインストールでは次のディレクトリが作成されます。
`/opt/oracle/solarisstudio12.3`

複数の Oracle Solaris Studio をインストールする場合の制限事項

Oracle Solaris Studio ソフトウェアは同じシステム上に複数インストールできますが、次の制限事項があります。

- ある特定のシステム上で各リリース (Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェア、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェア、Sun Studio 12 Update 1 ソフトウェア、Sun Studio 12 ソフトウェア、Sun Studio 11 ソフトウェアなど) をインストールできるのは、一度だけです。
- Studio ソフトウェアの各リリースは、異なるインストールディレクトリにインストールする必要があります。
- Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのコンポーネントを 1 つ以上インストールした場合、Oracle Solaris Studio 12.3 コンポーネントの将来のインストールはすべて、同じディレクトリ内にインストールされます。

Linux プラットフォームで利用できないインストーラの機能

次のインストーラの機能は、Linux では利用できません。

- ゾーンへのインストール
- `/usr/bin` と `/usr/share/man` へのシンボリックリンクの追加

以前のバージョンの **Studio** ソフトウェアのアンインストール

Oracle Solaris Studio 12.3 インストーラは、Studio ソフトウェアの以前のバージョンを削除しません。たとえば、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアのインストール先と同じインストールディレクトリに Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをインストールする場合、Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアを明示的にアンインストールする必要があります。

/usr/bin と **/usr/share/man** のシンボリックリンクの効果、および回避方法

`/usr/bin` および `/usr/share/man` ディレクトリ内にインストーラによってシンボリックリンクが作成されるときに、特定のバイナリやマニュアルページセクションへのリンクが作成されません。作成されないリンクと、リンクされないバイナリおよびマニュアルページにアクセスするための回避方法を次に示します。

- Studio ソフトウェアに固有のマニュアルページセクション

`/usr/share/man/man3c++/*` へのシンボリックリンクが作成されません。このディレクトリ内のセクションに表示されたマニュアルページには、最新の情報が含まれていません。man コマンドはデフォルトで、Oracle Solaris Studio 12.3 の次のマニュアルページセクションを検索しません。

```
man3cc4
man3f
man3p
man3pi
man3x
```

これらのいずれかのセクション内の最新のマニュアルページを表示するには、man コマンドの `-s` オプションを使用してそのセクションを指定します。例:

```
man -s 3x rtc_api
```

- マニュアルページの衝突

Oracle Solaris Studio 12.3 の一部のマニュアルページは、Solaris オペレーティングシステムの既存のマニュアルページと競合します。次の各マニュアルページのシンボリックリンクは作成されません。Solaris 版へのリンクが保持されます。

```
/usr/share/man/man1 symlinks not created: intro.1, ctags.1
```

```
/usr/share/man/man3m symlinks not created: exp2.3m, feclearexcept.3m
fegetenv.3m, fegetexceptflag.3m, fegetprec.3m, fegetround.3m,
feholdexcept.3m, feraiseexcept.3m, fesetenv.3m, fesetexceptflag.3m,
fesetprec.3m, fesetround.3m, fetestexcept.3m, feupdateenv.3m,
fex_get_handling.3m, fex_get_log.3m, fex_get_log_depth.3m,
fex_getexcepthandler.3m, fex_log_entry.3m, fex_merge_flags.3m'
fex_set_handling.3m, fex_set_log.3m, fex_set_log_depth.3m,
fex_setexcepthandler.3m, isinf.3m, isnormal.3m, log2.3m,
signbit.3m, sincos.3m
```

- これらの Studio マニュアルページにアクセスするには、man コマンドで `-M path` オプションを使用します。
- 非推奨のバイナリ

```
/usr/bin/ptclean symlink is not created.
/usr/share/man/man1/ptclean.1 symlink is not created.
```

異なるディレクトリへの **Oracle Solaris Studio 12.3** ソフトウェアのインストール

Forte Developer 6 ソフトウェア、Sun ONE Studio 7 ソフトウェア、Sun ONE Studio 8 ソフトウェア、Sun Studio 8 ソフトウェア、Sun Studio 9 ソフトウェア、Sun Studio 10 ソフトウェア、Sun Studio 11 ソフトウェア、Sun Studio 12 ソフトウェア、Sun Studio 12 Update 1 ソフトウェア、または Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアがインストールされている場合は必ず、インストール手順に従って Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアを別のディレクトリにインストールしてください。

エラーメッセージなしでインストールデータの抽出に失敗する

--extract-installation-data オプションを指定して非 GUI インストーラを実行した場合、ユーザーが読めるエラーメッセージが表示されずに実行が失敗することがあります。

register_solstudio ユーティリティーが登録ページを生成しないことがある

インストールディレクトリ内で register_solstudio ユーティリティーを実行すると、登録ページの生成とブラウザ内でのオープンが行われない場合があります。

回避策:

1. register_solstudio ユーティリティーを *installation_directory/bin* から *installation_directory/bin/condev/bin* にコピーします。
2. *installation_directory/bin/register_solstudio* を、*installation_directory/bin/condev/bin/register_solstudio* へのシンボリックリンクで置き換えます。
3. register_solstudio ユーティリティーを実行すると、登録ページが生成され、そのページがブラウザで開かれます。

IDE、DLight、およびコードアナライザの情報

Oracle Solaris Studio 12.3 の IDE、dbxtool、DLight 可観測性ツール、およびコードアナライザに対するアップデートはすべて、これらのツールでデフォルトで無効になっている NetBeans オートアップデート機能経由で配布されるのではなく、Oracle Solaris Studio 製品パッチとして配布されます。

次の場合には、そのような製品パッチのインストール時にこれらのツールで競合が発生する可能性があります。

- ツール内でオートアップデート機能が有効化されており、かつ自動的なアップデートが発生した場合。
- NetBeans アップデートセンターからプラグインをインストールした場合。

競合を解決する方法:

- Solaris 10 上でパッケージインストーラを使用して、または Solaris 11 上で IPS リポジトリから、Oracle Solaris Studio ツールをインストールした場合、*ide-12.3-OS-architecture* (IDE または DLight 用)、*dbxtool-12.3-OS-architecture*、または *code-analyzer-12.3-OS-architecture* を、Solaris Studio のユーザーディレクトリ *~/solstudio* から削除します。
- ダウンロード tar ファイルを使用して Oracle Solaris Studio ツールをインストールした場合は、その tar ファイルを再インストールします。

サードパーティーソフトウェアの情報

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアには、『[Oracle Solaris Studio 12.3 Program Documentation Third Party Notices and Licenses Guide](#)』によって管理されるサードパーティーのテクノロジーが含まれています。配布可能なライブラリの情報など、追加のリーガル詳細については、[Oracle Solaris Studio 12.3 ドキュメント索引ページ](#)の「Legal Information」セクションを参照してください。

Usage Data to Oracle

使用状況をオラクルに送付する機能は、Oracle Solaris Studio コンポーネントの使用状況に関する情報を、Oracle Corporation に定期的送信します。この情報は、Oracle Solaris Studio ソフトウェアの将来のリリースを改善する目的で、Oracle Corporation によって使用されます。この情報は匿名であり、この情報を個人や組織に関連付けることは一切できません。

ただし、Usage Data to Oracle を無効にする場合は、SUNW_NO_UPDATE_NOTIFY 環境変数を false 以外の任意の値に設定してください。

今回のリリースで削除された機能

次の機能は、このリリースの Oracle Solaris Studio で削除されました。

C++ コンパイラの `-compat=4` オプション

`-compat=4` オプションを指定すると、C++ コンパイラが互換モードに設定されます。つまり、このオプションは、言語とバイナリレベルの互換性を、4.0.1、4.1、および 4.2 コンパイラに合わせて設定します。これにより、`__cplusplus` プリプロセッサマクロが 1 に、`__SUNPRO_CC_COMPAT` プリプロセッサマクロが 4 に、それぞれ設定されます。

`-xarch=v7/v8/v8a` コンパイラオプション

`-xarch=v7`: SPARC-V7 ISA 用にコンパイルします。このオプションは廃止または互換性がなくなる可能性があります。現在の Solaris オペレーティングシステムは SPARC V7 アーキテクチャーをもうサポートしていないため、このオプションを指定してコンパイルされたプログラムは、現在のプラットフォーム上では実行速度が低下します。

`-xarch=v8`: SPARC-V8 ISA 用にコンパイルします。このオプションにより、コンパイラは、V8 アーキテクチャー上で優れたパフォーマンスを実現するためのコードを生成できます。このオプションは廃止または互換性がなくなる可能性があります。

`-xarch=v8a`: SPARC-V8 ISA の V8a バージョン用にコンパイルします。V8a はその定義から V8 ISA を意味していますが、`fsmuld` 命令は含みません。このオプションを使用して、コンパイラは、V8a ISA で良好なパフォーマンスが得られるようにコードを生成できます。このオプションは廃止または互換性がなくなる可能性があります。

`-xarch` オプションの現在のデフォルト値は、`v8plus` です。この値では、SPARC-V9 ISA の V8plus バージョン用にコンパイルされます。V8plus はその定義から V9 ISA を意味していますが、V8plus ISA 仕様で規定された 32 ビットサブセットに限定されており、Visual Instruction Set (VIS) は含まず、その他の実装固有の ISA 拡張も含みません。

libcx

このライブラリは、廃止または互換性がなくなる可能性があると考えられています。libcx の内容は、システムライブラリ libc で取得できます。

er_kernel コマンドの `-Tpidltid` オプション

このオプションを使用すれば、特定のプロセスまたはカーネルスレッドに対するカーネルプロファイリングを指定できます。

ScaLAPACK

ScaLAPACK 実装は、Oracle Message Passing Toolkit (以前の Sun HPC ClusterTools) のユーザーに対して分散メモリ線形代数ルーチンを提供し、クラスタ環境で高性能な並列計算を行えるようにします。ScaLAPACK は <http://www.netlib.org/scalapack/> で入手できます。

IDEでの実行時検査のサポート

IDEで実行時検査のサポートが使用できなくなりました。この機能は、dbx コマンド行デバッガやdbxtool デバッガ GUI では引き続き使用可能です。

今後のリリースで削除される機能

次の機能は、Oracle Solaris Studio の将来のリリースでサポートされなくなる可能性があります。

-xbinopt=prepare

-xbinopt コンパイラオプションは、あとで最適化、変換、および分析を行えるようにバイナリの準備を整えるよう、コンパイラに指示します。

注釈がデフォルトで生成され、-xannotations オプションによって制御されるようになりました。

-features=%all,%none

これらのC++ オプションの結果は予測不可能です。

Fortran の古いモジュール形式

Forte Developer 7 Fortran 95 7.0 以前のリリースで生成された古いモジュール形式は、公式にはサポートされません。

従来型の C++ iostream

従来型の iostream (libiostream) は iostream の 1986 オリジナルバージョンであり、1998 C++ 標準で置き換えられました。これを選択するには、-library=rwtools7,iostream オプションを使用します。「従来型の」iostream の実装はどれも同じでないため、このライブラリが廃止済みというだけでなく、このライブラリを使用するコードには移植性がありません。

tools.h++ ライブラリ

tools.h++ は C++ 基本クラスライブラリの 1 つです。Oracle Studio 12.2 ソフトウェアや以前のリリースの Sun Studio ソフトウェアには、このライブラリのバージョン 7.1.0 が含まれていますが、これは 1996 年にリリースされたもので、その後あまり更新されていません。時刻や日付のクラスには、修正不可能な深刻なバグが含まれています。tools.h++ ライブラリを選択するには、-library=rwtools7 オプションまたは -library=rwtools7_std オプションを使用します。

tools.h++ の機能は、C++ 標準ライブラリや BOOST ライブラリで使用可能ですが、そのプログラミングインタフェース (API) は異なります。tools.h++ の最近のバージョンについては、Rogue Wave ソフトウェアの Web サイト (<http://www.roguewave.com>) を参照してください。

systemt.h ヘッダーファイル

この C++ ヘッダーファイルは Cfront の名残であり、unistd.h よりも古いファイルです。代わりに unistd.h を使用してください。

ドキュメントについて

この節では、Oracle Solaris Studio 12.3 のこのリリースのドキュメントについて説明します。このリリースノートの情報、ほかのすべてのマニュアルの情報よりも優先されます。

Oracle Solaris Studio 12.3 リリースに含まれるドキュメント

Oracle Solaris Studio 12.3 のこのリリースには、次に示すドキュメントが含まれています。

- オンラインヘルプ。IDEの「ヘルプ」メニュー経由で使用可能なオンラインヘルプは、IDEのすべてのコンポーネントの使用方法に関するタスク指向の情報を提供します。パフォーマンスアナライザとスレッドアナライザのオンラインヘルプは、パフォーマンスアナライザ GUIの「ヘルプ」メニュー経由で使用できます。DLight、コードアナライザ、およびdbxtoolのオンラインヘルプは、これらのツールの「ヘルプ」メニュー経由で使用できます。
- 『Oracle Solaris Studio 12.3 リリースの新機能』。このドキュメントでは、Oracle Solaris Studio 12.3 リリースの新機能、パフォーマンス向上、問題と回避方法、および制限について説明しています。問題と回避方法に関する追加情報がリリースノートに含まれている可能性があります。このドキュメントにHTML形式またはPDF形式でアクセスするには、[Oracle Solaris Studio 12.3 ドキュメント索引ページ](#)を使用します。
- マニュアルページ。ユーザーコマンド、コンパイラに付属しているライブラリ、およびその他のタイプのコマンドを説明するオンラインのリファレンスマニュアルページです。コマンドの構文、使用法、関連コマンドなど、参考情報が含まれています。
これらのドキュメントには、インストールされたOracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのmanコマンドを使用してアクセスできます。
- Oracle Solaris Studio 12.3のマニュアルやチュートリアル。これらのドキュメントにHTML形式またはPDF形式でアクセスするには、[Oracle Solaris Studio 12.3 ドキュメント索引ページ](#)を使用します。

マニュアル要件

PDF形式で入手可能なドキュメントを表示するには、Adobe Acrobat Reader ソフトウェアが必要になります。このソフトウェアをダウンロードするには、<http://www.adobe.com/products/acrobat/readstep.html> にアクセスしてください。

国際化および日本語化に関する情報および既知の問題

現在確認されている、国際化および日本語化に関する情報および問題点を説明します。

ja_JP.PCK ロケール

制限事項

すべてのツールにおいて、ファイル名およびディレクトリ名にPC漢字(シフトJIS)コードを使用した場合の動作は保証されません。

PC漢字(シフトJIS)文字列を、コメントまたは文字リテラルとして直接Cのソースコード中に埋め込んで使用する場合には、次のように-xcsi オプション付きでコンパイルする必要があります。

```
% cc -xcsi sjis_src.c
```

このオプションは、構文解析部で文字リテラルをバイト単位ではなく文字単位で扱うためのものです。したがってソース中にPC漢字(シフトJIS)文字列が使われていない場合は使用する必要はありません。また、このオプションはCコンパイラでPC漢字文字列を扱うための一時的な解決法で、将来のリリースでのこのオプションのサポートは保証されません。

Cコンパイラでは、コメントおよび文字リテラル以外でPC漢字(シフトJIS)コードを使用した場合の動作は保証されません。

Cコンパイラで-xcsi オプションを使用した場合は、コンパイル時間が多少長くなります。

lint コマンドの制限事項

lint コマンドはja_JP.PCK ロケールに対応していないため、ソースコード中にPC漢字(シフトJIS)文字列が使用されているとエラーが発生する場合があります。その場合には、Cコンパイラの-v オプションを使用してください。

```
% cc -xcsi -v test_prog.c
```

ja_JP.PCK ロケール上での既知の問題

dbx の次のコマンドで、PC 漢字(シフト JIS) 文字の 2 バイト目が \ (0x5c) になるような文字を引数に使用すると正しく動作しません。

debug, dalias, file, check, clear, collector, files, fix, line, loadobject, assign, dbxenv, source, trace, run, rerun, runargs, call, bsearch, search (バグ ID: 4262961)

dbx の次のコマンドで、PC 漢字(シフト JIS) 文字の 2 バイト目が { (0x7b) または | (0x7c) になるような文字を引数に使用すると正しく動作しません。

runargs, run, debug, dalias, file, clear, collector, fix, line, loadobject, dbxenv, source (バグ ID: 4700248, 4699574)

dbx の list、bsearch、search コマンドで、いくつかの半角カナ文字を引数に使用すると正しく動作しません。(バグ ID: 4263317)

ja_JP.UTF-8 ロケール

ja_JP.UTF-8 ロケール上での制限事項

すべてのツールにおいて、ファイル名およびディレクトリ名に UTF-8 文字コードを使用した場合の動作は保証されません。

Copyright ©2011 このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

E26446

Oracle Corporation 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065 U.S.A.